

合い、今までの家庭生活をよく理解し、その原因となるものを取り除く方向に努力する。

第二の点については、外にその子どもに適当なグループをつくってみるとか、その子どもが関心を寄せているグループの構成をその子どもを加えることによって、変えてみるとかの配慮を行なうことも必要となってくる。

Hは、家庭では、祖母と遊ぶことが殆んどで父母はあまりかまってやれず家の中で静かに育てられた。入園当初は少し押されたという泣き、怒り、反面自分の意が通らないと手を出す。何でも途中でほうり出してしまふ等がひどく、誰ともうまく遊べない。

しかし友達と遊ぶことには今までにない魅力を感じ非常な関心を寄せていた。にもかかわらず決して自分からは入っていかうとしな。まず家庭に対しては父母と過す時間を出るだけ多く持ち近所の子どもとも、大いに遊ぶ事をすすめる。幼稚園では、自分で出来ることは、一生懸命終りまでするように励まし、友達には、女の子を選んでその中で安心して遊べるようにしてみた。ままごと遊びに自分の役割を得たHは、今張り切っている。自信を持つことが出来たHがやがて活発な遊びの

中にも入っていきけるだろうと見守っている。

年少組の子ども達の保育に当って特に、子どもの間に生まれた子ども同志の結びつき的重要さを痛感し、保育カリキュラムに表面的には現れないが、何よりもその奥深くにある目に見えない世界での子ども達の心の動きを保育者がしっかりと把握、より良いものを生み出していくように、その場、その時を大切にして、誠意をもって努力したいものだと思う。子ども達は、安定した友達関係を得てこそ、始めて、各々の持味をそれぞれの場で十分に発揮し、生々とした生活を送ることが出来るのだろう。そして、この一年間をふり返ってみて、子ども達の内面的な動きを正しく把んでゆくために、保育者自身の心の目を豊かに養ってゆきたいものだ、つくづく感じるのである。

(平安女学院短期大学付属平安幼稚園)

一年の歩み

米内みさ

幼稚園の中に、また組の中には個人個人が作った大きささまのグループがいくつもあ。リーダー的な人の命令のままに動こうとするグループ、いつも破壊的な行動ばかりするグループ、消極的な人ばかりが集まるグループ、またグループには全然入ろうとしない人など……。それを座席により、また、仕事によって、或いは地域別、好きな人同志など、人為的に組む事によって溶け合わせる必要がある。

そこで、私もこの一年、二年保育の年長組を持って心がけ、また、子ども達がグループ活動と自立性においてこんなに成長したと思う事を二、三ふりかえてみたいと思う。

○体力的なグループ遊びにおいて

一学期の始めには、数人ずつのグループが砂場、ブランコ、ジャングルなど、主に遊具を媒介としてその場その場の結びつきを持っていた。このような遊びの時には、スクールバスで通っている影響もあって地域的な結びつきの方が強いようである。「御商売は」「開戦ドーン」「リレー」などの遊びにしても私共が中に入って一しょに遊ぶ事が多く私共がぬけるといつの間にかばらばらになってしまう。

六月頃になると、自分達だけでお友達を誘って「開戦ドーンするものこの指とまれ」と私共の前を歩き来して遊びに誘おうとするが、道具さえ出してあげれば、自分達だけで線をかき、さっそく二組に分れて得点表を作る人も出て来る。○○ちゃんは、遅いからいやだ」と意地悪を言う人もいるのであるが、砂場の隅や柱の陰で見ている人達にも親切な声をかけてあげる人も出て来た。

勝ち負けには興味が強く、自分の組が勝つように一生懸命しようという気持が他のどの保育よりも早く表れてきた。

二期の終り頃には、もう従来遊びにはあきて、新しい遊びを考えるようになった。子ども達がコロコロ・バスケットと呼んでゐるのもその一つである。二組に分かれ一定のコート内から外のかごの中にボールを投げ入れ、入れば一点とれるというものである。公園に園外保育した時にボールを持っていった。始めは投げ上げては受けとるあそびをしていた。次の時には、ゆるやかな傾斜を持つたすり鉢型のサークルのなかだけでやる事になった。サークルの外の輪になっているベンチの中に投げ入れようという事からこの遊びが

始つたのであつた。始めはボールの取りっこで大ききわざをして泣いたり喧嘩をしたりした人も、それで「ひが統かない」という経験を通して少しずつボールを作つた。①ボールを受け取つた人が投げ入れることが出来る。②取りっこになつたらやりなおす。③人の持っているボールにさわつてはいけない。④投げ入れた人がみんなのいる方にボールを返す。などで遊びながら少しずつ変えていく。ボールを受け取つたら自分が投げ入れなければいけない人も点を取る為にはかごに近い人や投げるのが上手な人に渡した方が良くということも理解し、点を取ろうとする気持ちも自然に出て来る。リレーにしても一学期には「○○ちゃんは遅いから嫌いだ。」といつていた人も遅くとも一生懸命やればえらいんだということも理解し、そういう人に拍手をし、声援し、励ましたりするようになった。

○製作やごっこ遊びにおいて

共同製作やごっこ遊びをする場合には、ある程度の意図を加えてグループを作る。いろいろなグループに入る事によつて、多くの人と接し、どの人とも仲良く遊べるようになってほしいからである。まず鯉のぼりを共同で

作る事になった。自然に地域別のグループに分れ、グループ内で何を使ってどういう鯉のぼりを作るかを話し合ひできめる。リーダー的な子どもがいるグループは、すぐに話し合ひがまとまって、どんどん作り始める。がリーダーについていけない人は不満そうに手をぬいてしまう場合も出て来る。みんなが我儘なグループは掴み合いの喧嘩しても決まらず、私共が意見を出す場合もある。このようなグループは最後までうまくいかず長期間を費しながらも出来たものは粗雑なのである。女兒の多いグループは譲り合つてうまくまとまる事が多いようである。まだまだ皆がしなければ出来ないという意識は少なく、誰かがやるだろうという依頼心からかグループ意識の全く見られない人もいる。出来上つた鯉のぼりには、そのグループの協力のしかたが良く表れている。あるグループでは、色をまぜないでいるように注意し合つている。余り進んでいないグループも出来上りそうなグループを見て「ぼく達もやらないと飾れない」とあわてて作つたりで、グループ間でもお互に感化し合つている事がわかつた。出来上つた鯉のぼりをボールに上げた時には、鯉のぼりの

歌が自然に子どもの口からとび出して来た。

次に一人ひとりが自分の役割に責任を持つという意味から三才児を招待しての乗物ごっこを取り上げて見た。三才児を招待することはこの遊びを通して年長組が年少組の子ども達に遊び方を教え、年少が年長に年長らしきと思いやりを要求して互いに影響し合う良い機会だと思う。みかん箱、ビール箱に金槌で車をとりにつけたり、大きな筆で窓や、ドアを描いたり大奮闘。一つでは汽車にならないからつなげようということ側にいる人と組み「朝風号」「こだま号」などグループが出来て数種の列車が出来た。近くの人とすぐにグループになれるのは男児に多く女児は一人でこつこつ自動車やケーブルカーを作っている人が多いようである。鯉のぼりの時には協力出来なかつた人もグループ内で出来ていない車があつたりすると自由遊びの間にも集まっては余念なく手を入れている。地域別に東京駅、大阪駅、羽田飛行場線路つくり、三才児の父兄役を分担し、更にグループ内で駅長さんや切符の係を代り合つてすることになった。

当日はどの人も自分の役目をはっきりしているので張り切つて自分の責任を果している

た。三才児に対する心づかいもたいへんで「ここで切符買うのよ」待っていると汽車が来るよ」といいながら肩をかかえるようにしていたわっている。片づけも、いつもなら逃げてしまう人も今日は体力を使つて十分に遊び満足したせいか自然に気を合せて最後までまとまつた行動がとれた。「先生、また何か考えてきく組さん呼んであげようね。」というこ

とばが年長らしい喜びと自信に溢れていた。二学期も半ばを過ぎる頃には、お友達同志の思いやりがかなり身について来たようである。自分達で作つた紙芝居の説明の時には、出来ないう人に教えてあげたり、お休みの人の分は、自分達からどんどんやってくれるのである。

その頃年中組と合同で動物園ごっこをした。好きな人同志が三・四人ずつ組んで大きな動物を作り、開園の日にはそのグループの中で説明や飼育係も代り合つてすることになった。「9番 さる おやま」8番 そう あぶりか」などと書かれた札が自分達でおりをつくつて並べた動物の前にかかっている。説明係が幼稚園から見に来た人に動物の名前や食物や産地を説明している。私共は入口の所に

立つてその様子を見ていただけで良くなつた。作りながらの話合いも盛んで自分達の考え出した案をどんどんとり入れて作り、他のグループの人にまで「家の足はミルクの罐を使つた方がいいよ」と教えている。ぼんやりしている人があると「だめじゃないか先生にやらしちゃ ぼく達でやらなくちゃ」とか「使いかけの紙から使わないのもつたいないよ」というように責任と自主性を持ったことばもきかれるようになった。グループ内でのまたグループごとの感化とお互いのむずびつきが密接にかつ大きくなつた事がわかる。

運動会での協力の中にもこのことがうかがわれる。ゆうぎ会の劇あそびも自分達でことばを考え歌をつくり楽器の編曲もして、みんな自分達でしたんだという自信と努力が目に見えて育つてきたようである。

四月には体のまわりにも目立つて進歩した事が一年の間にも目立つて進歩した事に驚きと喜びを感じると共にもう私共が手を出す必要もない事に一抹のさびしさを禁じ得ない。また次の一年間、どんどのびていく子ども達に負けないよう一生懸命勉強していかねければと考えている。(神田寺幼稚園)